

日本婦道記

箭竹

山本周五郎

青空文庫

矢はまつすぐに飛んだ、晩秋のよく晴れた日の午後で、空気は結晶体のようにきびしく澄みとおっている、矢はそのなかを、まるで光の糸を張ったように飛び、あずち塚のあたりで小さな点になったとみると、こころよい音をたてて的につき立った。——やはりあの矢だ。いえつな家綱はそううなずきながら、的につき立った矢をしばらく見まもっていたが、やがて脇につくばっているこしよう扈従にふりかえって、

「そこにある矢をみなとつてみせい」

といった、扈從の者が矢立に残っているのをすべて取ってさしだした。四本あった。かれはその筈はずまき卷の下にあたるところを一本ずつ丁寧にしらべてみた、すると、はたしてそのなかにも一本あった、筈卷の下のところ「大願」という二字が、ごく小さく銘のように彫りつけてある。いま射た矢にもそれがあった、去年あたりからときどきその矢にあたる、はじめは気づかなかつたが、持ったときの重さや、弦をはなれるときの具合や、いかにもころよい飛びざまなど、いろいろなよい条件がそろっているのので、ああまたこの矢かと思ひあたるようになった。矢にもずいぶん癖のあるものだが、それほどはつきりしよくと性のそろったものはめづらしい、それでよく注意してみると、思ひあたる矢にはきまつたよ

うに「大願」という文字が彫りつけてあるのだった。

「たずねることがある、丹後たんごをよんでまいれ、西尾にしお丹後だ」

そう云つて家綱は床しょうぎ几ぎにかけた。扈從のひとり走つていつた。

御弓矢槍奉行おゆみややりぶぎようの丹後守忠長たんごのかみただながはすぐに伺候した。家綱はま

だ十九歳であるが、三代家光いへみつの潤達かっただな気性をうけてうまれ、

父に似てなかなか峻しゅんげん厳いへんなどころがおおかつた。弓矢奉行など

がじかに呼びつけられる例は稀まれなことなので、丹後守は叱責しっせきさ

れるものと思つたのであろう、平伏した額のあたりは紙のように

白かつた。

「ゆるす、近う」

二度まで促されて膝しつこう行する丹後守に、家綱は持っていた一本の矢をわたした。

「その箆巻のすぐ下のところをみい、なにやら銘のような文字が彫つてある」

「はっ……」

「読めたか」

「はっ、仰せのごとく大願と彫りつけてあるかに覚えます」

「一年ほどまえより折おりにその矢をみる、どこから出たものか、いかなる者の作か、とり糺ただしてまいれ」

「恐れながら」

丹後守は平伏して云った。

「御上意の旨は御不興にございましょうや、もしさようなれば御道具吟味の役目として丹後いかようにもお詫わびをつかまつります」
「いやそのほうは申付けたとおりにすればよい、なるべく早く致せ」

丹後守はその矢を持ってさがった。

將軍の御用の矢は、諸国の大名たちから献上されるものを精選し、もつともよい作だけをすすめることは云うまでもない、丹後守はみずから御蔵へいって、献上別になっている矢箱を念いりにしらべはじめた。ずいぶんの数だからそう早急にはわからなかつた。それでしたやくの者にも手伝わしたが、三日めになつてようやく問題の品のはいつている矢箱がみつかった。それは三河みかわのく

に岡崎の水野けんもつ忠善ただよしから献納されたものであつた。棹わくに嵌はめて十本ずつ十重ねになっている箱が五つある。つまり五百本あるわけだが、そのなかから「大願」という文字を彫りつけた矢が五十本あまり出てきた。

丹後守はその矢を持って水野家をおとずれた。けんもつ忠善もひじょうにおどろいた。大願とはなにを祈念するのか分らないけれど、將軍の手に触れるものだけに、そのような品を気付かないで献上したことは重大な粗忽そこつである。

「うえさまには御不興のようにござつたか」

「そう存じまして、当座のお詫びを言ごんじょう上じょうつかまつりましたところ、ただ申付けたとおり吟味せよ、急ぐぞ、との仰せにござい

ました、それでとりあえず、お知らせにまいったしだいでござい
ます」

忠善はぐつと唇をひきむすび、なにか思案をしていたようすだ
つたが、

「これは家来どもには知らせたくないと思う、さいわいこの月末
は参観さんかんのおいとまに当るから、日を早めて頂き、自分で帰国し
てすぐとり糺すでしょう、それまで御前をたのむ」

「承知つかまつりました、できるだけ早く吟味のしだいお知らせ
ねがいます」

念を押して丹後守は帰った。けんもつ忠善はじつとながいこと
矢筈のきわの小さな文字をみつめていた。

これは万治二年（一六五九）十月なかばのことである。話はこ
こで十八年まえ、すなわち寛永十八年（一六四一）にかえる、
ところは駿河するがのくに田中城下、新秋の風ふきそめる八月のある日
の午後のことであつた。

二

その時みよは縁側から庭の柿をみていた。まだ若木のきざはし
で、今年はじめて五つほど実をつけたが、雨や風のために落ちて
もう二つしか残っていない、それも熟すまで枝についているかど
うかわからないけれど、いまはまだ葉簇はむらのあいだに、つやつやと

した堅そうな光をみえかくれさせている。初生りはつなの柿を青竹で作った小さな籠にいれ、子供に背負わせると息災にそだつという俗習がある、みよは青柿をながめながらそれを空想した。二歳の誕生を迎える安之助やすのすけが、柿をいれた青竹の小さな籠を背にして、よちよちとあるく姿は考えるだけでも愛らしくたのしいものだった。——どうか一つでもよいから残つて呉くれるとよい。若い母親には酔うほどの空想だった。そこへ家士の足守忠七郎あしもりちゆうしちろうがはせ入つて来た、旅支度のまま脇の折戸からいきなり庭へ駆けこんで来たのである。埃ほこりまみれの髪、瘦やせて落ちくぼんだ頬、血の気のない顫ふるえる唇、それはひと眼で悪い出来事を直感させるものだった。

「御挨拶はごめん蒙こうむります」

かれは庭さきに膝ひざをおろして云つた、

「旦那さまには、久能山くのうざんにて御生害ごしやうがいにございます」

あまりに突然すぎたし、またあまりに思いがけない言葉だった、みよはわれ知らず「えっ」ときき返しそうにしてようやく自分を抑え、膝の上に置いた手にぐつと力をいれた、鼓動が胸きようかく膈かくをつきやぶりそうに思えた。忠七郎は乾いた唇をうちふるわせながら続けた。

「まちがいのもととは些細せさいなことでもございましたが、賀川弥左衛門かがわやざえもんさまが云いつのり、ついに抜き合せて、旦那さまにはみごとに賀川さまをお仕止めなさいました。見ていた者も旦那さまに非分

はない、賀川さまが悪いと申し合っておりましたが、旦那さまは勤役ちゆうの不始末を申しわけなしと思おぼしめ召し、結末のことを詳しく目付役へお書き遺しのうえ、その夜半、宿所にて御切腹にございました」

みよは昂こうふん奮を抑えたこわねでたずねた。

「それで、その大變は、お役目をおはたしあそばしてから後か、それともお役目はまだ残っていてか」

「不幸ちゆうのさいわいには、すでに奉納のお役は滞とどりなく終つたあとでございました」

ああそれでお名にかかわることはない、みよはそう思うと同時に、はじめてぶるぶるとつきあげてくる身顫いをとめられなくな

った。良人の百記ももぎがお役を申付かつて家を出かけたのは七日まへのことだった。その月二日に將軍家光に世子せいしが誕生した、水野けんもつ忠善はその祝儀として久能山東照宮へ石の鳥居を奉納することになり、茅野かやの百記はその事務がしらとして久能山へ出張したのである、なみなみの場合でないから、お役をはたしたかどうかということとは、悲嘆のなかにもなによりみよの気懸りなところだったのである。

「安之助への御遺言などはなかったか」

「……はい」

若い家士はつらそうに眼を伏せた、

「目付役へ始末書をお遺しあそばしましたほかは、一通の御遺書

もなく、御遺言のこともございませんでした」

みよは寂しそうに頷うなずいた、いかにも寂しそうな眼だった。

すぐにもお咎とがめの使者があるであろう、そう思ったので、召使たちにその旨を告げ、家内の始末にかかった。二百石の書院番で家財といっても多くはない、お上に収められるもののほかは僅かな衣類と仏壇だけがめぼしいものだった。ふだんつましく家計を守ったけれど、結婚して三年めであるし、安之助が生れたりして貯蓄は乏しかった、それで売れるものは売って、召使たちの餞せんべ別の足しにしなればならなかった。

城から上使が来たのはその翌々日の朝のことだった、みよは水髪に結び、着替えをさせた安之助を抱いて上使を迎えた。

「べつして大切なるお役目ちゆう、私の争いによつて刃傷にんじように及びたる始末、重罪をも申付くべきところ、即座に自裁して責せめを負いたる仕方しんみように思召され、よつて食禄しよくろく召上げ遺族には領内追放を申付くるものなり」おたつしの趣意はそういうものだった。それから上使の役人は久能山で没収した百記の遺品のうち、金二枚に小銭のはいつている金かね囊ぶくろと、大小ひと腰のかたな、それにひとつかみの遺髪をとりだして渡した。上使をおくりだしてから、みよは仏壇にあかしをいれ、良人の遺髪をあげて、香を炷たいた。そして安之助とふたりしてその前に坐つたとき、はじめて思うままに、しかしこえをしのんで泣いた。

「安之助、さあ、お手を合わせて、よくおがむのですよ、こうし

て」

幼ない者の手を合わせてやり、低く唱しやうみやう名念仏しながら、みよは涙のなかからしつかりと遺髪を見あげて云った。

「旦那さま、安之助の事は御安心あそばせ、かならずりっぱなさむらいに育てあげてごらんにいれます。御遺言のなかつたのは、わたくしをお信じあそばしてのこととぞんじます。みよはそのお心を決して忘れませぬ」

そのとき襖ふすまのかなたで、耐えかねたように誰かのすすり泣くこえが聞えた。

あくる日の朝、みよは安之助を背に負つて家を出ていった。美濃のくにかのうはん加納藩に実家があるので、ひとまずそこへ落ち着くことにきめたのである。お咎めによる追放なので、知りびとは云うまでもなく、召使たちも見送ることはできなかつた。ただひとりだけ、藤ふじえだ枝の在から奉公に来ていた下僕げぼくの六兵衛ろくべえが、目付役とともに島田しゆくの宿まで送つてきた。かれは美濃までの供をねがつてきかなかつたけれど、みよはかたく拒んでゆるさなかつた。残暑の照りかえしで、ひろい川原は眼もくらみそうな暑さだった、母お子はやこその川原をとぼとぼあるいてゆき、やがて人足の肩よに倚つてかなたの岸へと越していった。

それから三日経った。早^{ひで}りの続いた夏のあとで、待ち兼ねた雨がまさしく秋のおとずれのように降りだした日の夜、八時ころと思えるじぶん^{みずもり}に藤枝在の水守という村にある六兵衛の家をひそかにおとずれる者があつた。六兵衛の婿の次郎吉が出てみると、城下のお屋敷でみかけたことのあるみよにまぎれはなかつた。安之助を背に負つてびっしより濡れていた。

「まあこれはどうあそばしました」六兵衛もびっくりしてとんで来た、

「いやそれよりもまずお召替えをなさらなければいけません。ただいま洗足^{すすぎ}をお持ち申します」

娘のさだと婿をせきたてながら、自分が洗足をとつてすぐに母

子を上へあげ、娘の晴着と孫の物を当座のまにあわせて着替えをさせた。いちど眼をさまして泣きだした安之助をようやく寝かしつけてから、みよは六兵衛と婿夫婦を前にして坐つた。そして、主従のよしみにすがつたのむのであるが、この土地でなにかたつきの業わざにとりつくまで母子ふたりの世話をしてもらえぬだろうかと云いだした。六兵衛はおろおろと声をふるわせてさえぎつた。「お言葉ではございますが、おまえさまは御国ばらいのお身の上でございますし、おふたりさまのお世話は願つても出たいところでございますけれども、まんいちこれが知れたときは国法にそむいた罪に問われ、おまえさまばかりか安之助さまの御一命にもかかわると存じます、それよりはともかく美濃のおさとへお帰り

あそばすほうがよろしいのではございませんか」

「それはよくよく考えてみたのです」

みよはずかに、けれど心のきまつたしつかりとした口調で云った、

「けれど百記は水野けんもつさまの御家臣でした、不運に死にはしても、百記の魂はかならずごしゆくんの御守護をしている筈です。わたくしは茅野百記の妻、安之助はその世継ぎなのです。たとえどのような重罪に問われましよう、さむらいにはごしゆくんのおくにを離れてほかに生きる道はないのです、……主従は三世までというではないか」

六兵衛は両手で顔をおおい、こえをしのんでむせびあげた、さ

むらいの道のきびしさもさることながら、良人の魂の遺っている土地を去りがたい妻の心が、みよの言葉の裏にありありとうつつてみえたのである。

「よくわかりました、そのお覚悟なればもうなにも申上げること
はございません、お世話というほどのことはできませんが、お力の
足しくらいにはなります、お心おきなくおいであそばしませ」
母子はその夜から六兵衛の世話になることになった。

家族は六兵衛と娘夫婦、それにまだ幼ない孫が二人あり、半自作のあまり豊かならぬ農家だったので、はじめから安閑として
いるつもりはなかった。みよは、家人のとめるのもきかずに、あくる
日から甲斐々々しく野良へ手伝いに出た。世を忍んで、しかし心

のひきしまった生活がはじめられた、昼は耕地ではたらき、夜は草鞋わらじをつくり繩をなつた、かまどの前にも躡かがみ、野風呂を焚いた。そういう日々のなかで、たつたいちどだけ人眼にかくれて泣いたことがあつた、それは背戸にある柿の若木が、枝もたわわに赤い実をつけたのをみたときだつた。——城下の家の柿はどうしたかしら。そう思うのといっしよに、あの悪い知らせのあつた日縁側からうつとりと青柿を眺めていた自分の姿が思いかえされた。良人が生きていたら、そしてあの初生りの柿が一つでも熟れていたら、いまごろは青竹で籠をあんで、安之助の背に負わせて、あやうげな足どりであるくさまを良人と共に笑いながら見ていたであらう。みよの眼にはそのありさまがまざまざと見えた、それは未

練な、恥ずかしいことだった。——こんな事で二度と泣いてはいけない。みよは泣きながら、繰返し自分にそう誓っていた。

翌年七月、けんもつ忠善は三河のくに吉田城へと封を移された。それでみよも吉田へゆく決心をした、六兵衛と家人たちは言葉をつくしてとめた。此処ここにいればこそ乏しくとも無事な日が暮せるのである、幼ない者をつれ、まだ若い婦人の身で、しるべもない他国へゆけばどんな難儀に遭うかもわからない、せめて和子わこが十歳になるまではこの土地で暮すようにと。

四

みよの決心は、けれど変らなかつた。「ごしゆくんけんもつさまのいらつしやる土地が母子の生きるべきところなのです、身の難儀ははじめから覚悟のことですから」そう云つて心づよくしゅつたつの支度をはじめた。

六兵衛に見送られて大井川を渡つたのは八月はじめのことだつた。みちすがら道次は残暑になやまされたが、さいわい水にもあたらず、

安之助もすこやかに旅をつづけて四日めに三河のくに吉田（今の豊橋市）へ着いた。たやすくしる記せないかずかすの苦労があつたけれど、その年の冬には小坂井こさかいの里に小あきないの掛け小屋をはじめることができ、どうやらふたりの口はすごせることになつた。

みよは安之助に少しずつそとく素読の口まねをさせたり、筆を持たせて

かな文字を書かせたりしながら、いとまを惜しんでせつせと草鞋をつくつた、海道のこととて往来の人は絶え間がなかつたから、それは追われるほどもよく売れた。まして六兵衛の家でならい覚えたのは、農夫が自分の使うために作るものなので、はじめから売るように出来たものとは保ちかたが違つていた、それゆえしばらくするうちすっかり評判になり、よその店を通り越しても買いに来る客ができて、僅かながら不時の用にと貯えもつめるようになった。

安之助が六歳になるとみよは付近の禪寺へたのんで学問をはじめさせた、寺僧は由^{よし}ありげな母子のひとがらに同情したとみえ、——いつそ寺へお預けなされたらおまえさまもお身軽になれまし

ようが。と親切にすすめて呉れた、しかしみよは子をはなす気にはなれなかった。まだ朝々の霜のふかい早春の野道を、安之助は元気に寺へかよつてゆき、帰つて来ると、声をはりあげて復習をした、そしてみよの夜なべはそれからいつそう晩おそくまで続けられるようになった。こうしてどうやら身のまわりも落ち着いたと思ふとき、水野忠善はふたたび国替えとなり、五万石に加封かほうのうえおなじ三河の岡崎城へ移された、正保しょうほう二年七月のことである。まる二年のあいだに多少の知りびともでき、なりわいの道もついてほつとしたところだったけれど、みよの心には少しも未練はなかつた。ふしぎなまわりあわせで、そのときもまた新秋八月の、残暑のきびしい一日、少しばかりの荷物を負い安之助の手をひい

て、みよは小坂井の里を西へと立っていった。

岡崎もはじめての土地ではあつたが、東海道ではゆびおりの繁昌な駅だったから、伝馬町てんまちようすじの裏に長屋の一軒を借りると、その家ぬしの世話で、さしたる苦労もなく城下はずれのなわてみち 躰道なわてみちに、小坂井でしていたのとおなじ小あきないの店をもつ事ができた。家主の名は熊造くまぞうと^{ひげ}いった。固ぶとりに肥った小がらなからだつきで、髭ひげだらけの顔にするどい眼つきをしているが、近所じゆうへ響くようなこえで日和のあいさつなどをする男だった。むかしは馬を曳ひいて海道を往来したという、暴れ者で、ずいぶん世間から嫌われたのだそうだが、それだけに世の裏おもてをよく知っていて、困っている者があれば身を剥はいでも面倒をみるとい

風だった、いまでは伝馬問屋の店をもつて親方ともいわれ、年々岡崎藩から幕府へ献上される竹束の輸送は、ほとんどかれの店がひとり占めの御用になっていた。熊造のひきたてもあつたらうけれど、驟道のみよの店はしぜんと海道に名をひろめていった、評判のもととはなんといつても草鞋だった。——やごめわろんじは百日はける。やごめは寡婦^{やもめ}、わろんじは草鞋のおかぎきぶりであるが、そんな通り言葉ができたほどみよの草鞋は人々にもてはやされた。

はりつめた生きかたの身にゆく春秋をかぞえるいとまはなかつた。安之助が十二歳になつて、かたちばかりに鎧^{よろい}初^ぞめの祝いをしてから間もなく、家ぬしの熊造があらたまつたようすで再縁の

はなしをもちだした。相手はところの郷士で、年は四十を越しているが家はもう子供にゆずっていたし、家産もゆたかなので、もしみやさえ承知なら別に家を建てて暮してもよいということだった。

「今だから申し上げますが、実はこれまでになんどもこういうはなしがあつたのです」

とかれは膝をかたくしてくそまじめに云つた。

「あなたほどのごきり縹よう織で独り身だからむりもないことだが、わたしは蔭かげながら御氣性をお察し申していたので、御相談にあがるまでもなくなにぬかすとひと言で断わつてきました。けれどもこの縁談だけはわたしも欲ができました、郷士といえぱりつぱにさむ

らいでとおる、失礼ながら安之助さまにもゆくすえ御運のひらけるもとだと思ひますが」

熊造の言葉は心からの親切がこもっていた、みよはしまいまで黙つて聴いていたが、聴き終るとすぐにきつぱりと断わつた、いささかも思い惑うことのない、きつぱりと割りきつた断わりかただった。

「やつぱりそうですか」

熊造はがっかりしたようすだった、けれど落胆のなかにもみよの凜りんとした気性をつきとめたことはたのもしく思えたらしい、かれはそのはなしをぴたりと切上げ、

「それではあらためて御相談があります」と坐りなおした。

五

相談というのはなりわいを変えることだった。安之助もそろそろ世間の見えはじめの年ではあるし、あきない店などを出しているとあらぬ噂うわさがたちやすいものである、だからそれをやめてほかに生活たつきの法を考えてはどうかというのだった。

「それには一ついいことがある、御承知かもしれませんがこの岡崎は竹の産地で年々お江戸へ献上する数もたいへんなものですが、そのなかに箭篋やべらにする竹があります、この竹を削つて磨いて、箭篋にする仕事があるのですがやってごらんになりますか」

「そのような仕事が女でもできるのでしょうか」

「おもてむきはいけないことになっているが、なにお出入りの屋敷でその宰領をしているからわたしがたのめばどうにかかります、これなら手間賃もいいし、草鞋をつくるよりは骨も折れないでしょう、その気がおありならお世話をいたします」

考えることはなかった。みよは畷道の店をたたんだ。

やだけ
箭竹やだけつくりは考えたほどたやすくはなかった。箭篋やみきまたは箭

ともいう竹のつくり方にはいろいろ作法がある、十二束そく、あるいは十三束みつぶせ三伏みつぶせなどといって、拳こぶしひと握りを束そくとよんで長さをきめる、そしてみきには節が三つあるのがきまりで、「おつとり節」

「なかの節」「すげ節」と上から順に名がつけられる。太さも長

さもほとんどきまつたのを選び、節を削り　をみがき、はず箬をき截つたうえ下塗りをすればよいのだが、すべてが熟練を要する勘しごとで、はじめのうちはよく失敗をした、節を深く削りすぎたり、箬截りの手がすべつて　へ割りこんだりした、しぜん自分でも手を傷つけることが多く、しばらくのあいだはいつも左手の指に白い巻き木綿の絶えるときがなかった。けれどもはじめがむつかしかっただけに、馴れてくると、みよはめきめきと腕をあげた、そして自分でも面白くなるにつれて、誰のつくるものにも負けないりっぱな箭をつくつてゆこうという望みがおこつた、それには竹を厳選しなければならぬから、渡された数と仕上りの数にひらきがでる、しぜん手間賃は少なくなるがみよは構わずやっ

った。——竹にむだをだしすぎる。はたしてそういう苦情がきた、土地から産する箭竹には限りがあるので、そうむだを多くしては困るといふのだった、みよは云いわけはしなかった。これから気をつけてむだを出さぬように致しますと答えた、けれど仕事は少しも変えずに続けていた。

安之助はすこやかに成長していった、辛苦のなかに育ちながら、氣質ものびのびとしていたし、年と共にからだつきも人にすぐれて遅たくましくなつた。学問には満まん性寺しょうじの方ほう丈じょうへ通つていた。十三歳の夏から投なげ町まちにある町道場へも入門させたが、父親の血をうけたのであろう、これは学問ほどにはすすまないようすだつた。こうしてさらに年月が経ち、安之助は十八歳の春を迎えた。そし

である夜のこと、かれはめずらしくかたちをただして母親の前に坐った。

「母上お願いがございます」

ひどく思いつめた眼つきだったので、なにを云いだすかと思つてしていると、自分もたつきを助けるために働きたいというのであつた。

「わたくしも十八歳です、男いちにんまえの稼ぎはできなくとも、母子ふたりの口をすくすくらいはどうかかなると存じます、どうぞ働きにやっして下さいまし」

「おやめなさい、そんなことは聞きたくありません」

「いいえ申します、母上にはお世話になりすぎています。修業ち

ゆうのからだゆえ今日まではおなさけに甘えておりました、けれどももう充分です、これ以上母上にご苦勞をかけることはできません、わたくしが代ります、どうか母上はもう賃仕事などおやめになつて下さい、お願いですから安之助に代らせて下さいまし」

「あなたは考えちがいをしています」

みよはしずかにさえぎつて云つた、

「母が働いてきたのはあなたをりっぱに成人させたいためにはちがいありません、けれどそれさえはたせば役が済むというわけではないのです」

「そのお言葉は安之助にはわかりません」

「わからない筈はないでしょう、それとも、いつかお話し申した

父上の御最期のことはもうお忘れですか」

そう云われて安之助はぎよつとしたようすだった。みよの顔も苦しそうに蒼あおずんだ、みよは面を伏せ、低く呟つぶやくような声でしずかに続けた。

「父上は、不運な出来事のために、御奉公なかばで世をお早めなさいました、やむをえなかつたのでしよう、そうせずにはいられない場合だつたのでしよう。けれど……さむらいの道にはずれたと申上げなければなりません、死んでゆく父上にも、おそらくそのことがなによりもお苦しかったと思います、父上の御気性は母がよく存じています、母には、父上の苦しいお心のうちがよくわかるのです。生きるかぎり生きてごしゆくんに奉公すべきからだ

を、私ごとのために自害しなければならなくなった、さむらいにとつてこれほど無念な、苦しいことはありません、母にはそれがよくわかるのです、どんなにおつらかったことか、どんなに御無念だったことか……」

安之助は腕で面を押えながら、耐え兼ねたように噎むせびあげた。

「ご生害のとき」

みよはそつと眼をぬぐいながら云つた、

「父上がいちばんお考えになったのは、あなたのことだと思いません、あなたが人にすぐれた武士になり、父のぶんまで御奉公をするようにとそれだけお望みなすつたと思います。あなたにはそう思えませんか」

「そう思います、母上、そう思います」

「それならご自分の修業を一心になさい、そして千人にすぐれた武士になるのです、それだけがあなたのつとめなのです、母のことなど気をつかつてはいけません、母には母のつとめがあるので、あなたを育てることと……父上のつぐないをすることです」

「つぐないと仰おっしやるんですか」

「つぐないです、父上の仕残した御奉公をつぐない申すのです、それが茅野百記の妻としての一生のつとめです」

安之助はしんそこから感動していた、かれは涙に濡れた眼をぬぐい、屹きつとかたちを正して母を見あげた。

「よくわかりました母上、わたくしは一心に修業をいたします、

そして千人にすぐれた武士になります」

「それをお忘れなさるな、道はまだまだ遠いのですよ」

「けれどいつかは、母上……いつかはわたくしたちの真心が、とのさまにわかつて頂ける時がございますね」

その言葉までうち消す気強さはみよにはなかつたし、しかもながく忘れることができなかつたのである。母と子の辛苦はどのような酬いをも期待するものではない、おのれのまことをつらぬきとおせばそれでよいのだ、けれども「いつかはこの真心をごしゅくにわかつて頂けるだろう」という安之助の気持もよくわかつた。それがみよの心に未練をおこさせた、ちようど六兵衛の家の背戸で熟れた柿の実をみつけたときのように、「母の心」がどう

しようもなくみよをうごかしたのである。——せめて安之助だけは世にだしたい。みよは母の愛情から一つのことを思いついた、それは箭竹をつくるとき、はずまき筈卷の下にあたるところへ「大願」と二字を小さく彫りつけることだった。きわめて小さく、たやすくはわからないように。もしかすればそれがごしゆくんのお手に触れるかもしれない、矢は的に射当てるものだから……。みよはますますよい矢をつくるようになった。そして必ず「大願」の二字を彫りつけていた。どうぞこの文字がとのさまのお眼にとまりますように。そう祈りながら……。

六

みずから審問に當つたけんもつ忠善は、みよの申立てを聴きな
がら泣いた、審問が終つて、自分の居間へはいつてからも涙がせ
きあげてきてとまらなかつた。——女にもあれほどの者がいたの
か。いくたびもそう思つた。武士の妻としては当然の覚悟かもし
れない、しかし当然のことがなかなかおこなわれにくいものであ
る。当面の大事にはりつぱに働くことができる者も、十年ふたい
てんの心を持ち続けることはむつかしい。みよはかくべつ手柄を
たてたというのではないし、かたちに現われた功績などはなかつ
た。しかし良人の遺志をついで二十年、微塵みじんもゆるがぬ一心をつ
らぬきとおした壮烈さは世に稀なものである、まことにそれは壮

烈といふべきだった、そういう一心こそは、まことの武士をうみ、世の土台となるものである。忠善はすぐに書状をしたためた、江戸では丹後守が待ち兼ねているにちがいない。かれはてみじかに事の始終を記したうえ、左のような章で筆を措おいた。

——重ねて申上げそろ、大願の二字はけんもつの眼にこそ触れめとて彫りつけ候そうろうものにござそろ、うえさまおん眼を汚し奉り候儀は、おそらくはみよの一心を神明の加護せさせたもうところと存じそろ、べつに使者を以て言上つかまつるべく候も、おんもとよりも御前よしなに御披露のほどたのみいりそろ。余事にわたり憚はばかりながら、かかるおんなこそ国のいしずえとも思われ、おそれながらうえさまおんためにも御祝ごしゅうちやく着申上ぐべく存じ奉りそろ。

安之助はほどなくめしだされて父の跡目を再興した。みよはそのとき、なおこう云つてわが子を戒めたのである、

「これで望みがかなつたと思うとまちがいですよ、むしろこれから本当の御奉公がはじまるのですから、今までよりもっと心をひきしめ、ひとの十倍もお役にたつ覚悟でなければなりません……あなたは茅野百記の子です、ひとさまとはかくべつなのですからね」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1942（昭和17）年12月

※表題は底本では、「箭竹《やだけ》」となっています。

※初出時の表題は「箭竹―岡崎藩の女性」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

箭竹

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>